

北九州市立大学  
文学部紀要

第82号

— 目 次 —

マラマッド文学における老いの描写のユダヤ的特質

前田 讓 治 …………… 1

北九州市立大学文学部  
比較文化学科  
2013

# マラマッド文学における老いの描写のユダヤ的特質

前田 譲治

## 梗概

マラマッド文学全体を視野に入れつつ登場人物を精査すると、老いの表象が濃厚な登場人物群と、それが些少な登場人物群の二グループに弁別されることが判明する。さらには、前者の登場人物群が人間性の面で押し並べて肯定的に描写されているのとは対照的に、後者の人物群に属する登場人物の人間性が否定的に描写されがちなることを明示した。ついで、各種ユダヤ文化論を援用することにより、それらの人物描写の傾向が、ユダヤ系の典型的な精神構造と調和していると同時に、アメリカで一般的とされている価値観と衝突関係を形成していることを指摘した。以上の論考を根拠に、マラマッドによる人物描写は、ユダヤ系としての確固たる自意識に基づいて展開していると結論付けた。

## Key Words

*The Natural, The Assistant, A New Life, The Fixer, Dubin's Lives, "The Magic Barrel"*

## Introduction

Bernard Malamud の小説における登場人物は、老いとの関係に注目すると、二つのグループに大別できる。つまり、人間に宿命的に伴う老いに対して拒絶的な姿勢を取る登場人物群と、対照的に、心安らかに老いを受容する登場人物群とに二分される。また、前者のグループに属する登場人物には、老いに関する表象の配置が些少となる傾向が強く、反対に、後者の登場人物においては老いを想起させる表象が集中している場合が多い。本稿においては、それらの二つのグループに属する登場人物の各々に対して、マラマッドがどのような人物像を割り当てているのかを再確認したい。その作業を通して、二つのグループが描写される際に、類似した人物像が各々のグループに対して配置される傾向が顕著である事実を明確化する。その後、各グループに対して作者が維持している人物像の一貫性と、作者の民族的背景とが、どのような形で連動しているのかを、ユダヤ文化論を援用しつつ分析する。以上の経路を経ることにより、作者の民族性とマラマッド文学の全体的構造との関連性を明示することを本稿の最終目的とする。

I

*The Natural* の主人公 Roy Hobbs が恋人を選択する際に最も重視する条件は、若さである。例えば、Iris Lemon はロイに対して無私の情愛を迸らせるが、33歳で孫を持つため、ロイの嗜好から完全に逸脱してしまう。実際、アイリスからロイに宛てられた手紙に彼への情愛が如何に横溢していても、彼女が祖母の立場にあることを二度目に伝える箇所に至ると、ロイは手紙を読み続けることを中断し、その手紙を破棄している(205)。さらには、彼女が惜しみなく示す情愛に感応しそうな時にロイは、彼女が祖母の属性を有することを特に意識化することにより、アイリスへの感情移入に歯止めをかけようとする(219)。実際に、ロイは、アイリスが祖母であることを特に意識化すると、彼女に対して芽生えかけた情愛が完全に霧消してしまう(159)。当然ながら、ロイが彼女との結婚を想定した際には、ロイが祖父の立場に陥ってしまう事実極めて強い拒絶反応を示す結果となる。以上のような、加齢に対するロイの極めて強い拒絶反応は、彼の野球に対する認識の中にも読み取ることが可能である。

まず、若い時期に野球人としてのキャリアを開始することが、野球において偉大な業績を上げることに直結するという発想にロイは囚われている(150)。また、ロイは自らが35歳であることが野球選手としての寿命の短さにつながるという視点にも過度に囚われている(221)。以上からは、加齢を過剰に敵視するロイの姿勢を指摘できる。若年であることを野球選手における無条件のアドバンテージと眺めるロイの世界観を、若き日の19歳のロイが参加した余興は例証する。すなわち、アマチュア選手時代のロイの投球を現役大リーガー Walter Wambold が打つという、衆人環境の中で行われた余興において、33歳のワンバルトは19歳のロイによって三振に切って取られ、面目を失う形で選手生命を絶たれるのだ。ロイとの勝負で敗者となり、面目が完全に潰れたワンバルトは“an old man”と描写されており(24)、野球の世界においては、老齢が決定的なまでに否定的要素となることが象徴的に表現されている。その上、大リーグに加入し主力選手となったロイは、彼の所属球団の優勝を左右する重要な打席において、無名の Herman Youngberry という20歳の若手投手によって三振に切って取られる。このように、高齢の選手が、より若年の選手に敗れるのが野球の試合の定型パターンとして設定されており、野球界に関する、ロイの加齢に対する忌避姿勢の正当性を例証する形となっている。野球に関する同様の世界観は、以下の形でも展開している。

新人の左翼手ロイが加入した球団においては古参選手の Bump Baily がレギュラー左翼手であり、彼らは守備位置が重複している。左翼手のロイがチームに新規加入したことにより、通例、フェンス間際の危険な捕球を嫌っているはずのバンプの外野守備の練習が真摯なものとなる(64)。さらには、バンプには緩慢な外野守備で無用な失点を招いていた経緯が過去にあり、それが原因となって、好機にロイの代打によって打席を奪われ、その機会にロイは殊勲打を放つ(73)。このような、ロイの活躍が原因で、爾後、緩慢な守備を行った場合は先発メンバーから除外するとの警告をバン

プは監督 Pop Fisher から受ける。このように、守備位置が重複するロイの新加入は、バンプの強い危機意識を喚起する。その結果、試合中にバンプは外野飛球の捕球に全力を傾注し、それが災いして、フェンスに激突して死去する (76)。この事故に関して、ロイのチームへの加入が、バンプの事故死の一因をなしていることを監督は示唆している (82-83)。その後は、ロイの活躍に伴って、先代の左翼手バンプに関する記憶がファンの脳裡から消失する (88)。バンプの年齢は明示されていないが、監督の指示を無視しがちな彼の姿勢からは、経歴の長さが読み取れる。つまり、球歴が長い選手が、より短い選手に取って代わられており、やはり、若い選手が年長者を駆逐するという球界のイメージが反復されている。他方、年長者であることは、監督の職責を担う上での重要な要件となる。しかし、本作で描写に紙数が割かれている唯一の監督、フィッシャー (ロイの所属チームの監督) は、権威の不在、チームに対する統率力の不在、行動の諧謔性が一貫して強調されている。以上のとおり、老いが絶対的に否定的な意義しか持たない場として作品が規定している野球界こそがロイの最大の安住の地なのである。この設定は、すでに確認済みの彼の価値観と正に調和している。

以上の議論との絡みで、ロイは破天荒な野球の記録を樹立することに執念を燃やすが、それは死を回避する方策として彼に認識されている点にも注意したい (150)。ロイは、加齢の先にある死を象徴的な意味で回避することにも腐心しており、この点でも、老いに対する彼の強固な拒絶的姿勢を確認できる。さらに、ロイの特徴は過去から学ばないこと、精神的に未成熟な状態に留まり続けることであるが (230)、これは若年と加齢、各々に対するロイの見方を配慮すれば、ロイが意識的に選択した存在様式とも解釈できる。しかしながら、作品の冒頭部分は、若年であることが知識の不十分さゆえに、行動の未熟性を招来する過程を描き出しており、ロイの志向性の限界も一方で示唆されている (10)。以上のような、老いを絶対的に唾棄し、老いが否定的な意味しか持ちえない世界に安住の地を見出すロイは、“self-centeredness” (Abramson 18)、“moral failure” (Wasserman 50)、“inner corruption” (Wasserman 50)、“his inability to surmount his infantile yearnings” (Walden 168) などが付随する人物として描かれており、極めて強い否定的色彩を帯びている。次章では、老いに対して、ロイと同様な視点を有する他の登場人物に目を移そう。

## II

*Dubin's Lives* の主人公、初老の William Dubin は、若い女性 Fanny Bick との姦通に耽る。その際に、ドゥービンがファニーの若さに特段の興味を示し続けている。例えば、ドゥービンがファニーの裸体を目視した際に、彼が最も着目するのは、その若々しさである (38)。さらに、ファニーとの接触を契機として、ドゥービンに若々しさが再興することが、彼が彼女との姦通を続ける大きな理由となっている (50, 72, 193, 209, 283, 333)。さらに、ドゥービンはファニーの目視と、彼女との共

存を通して、過ぎ去ったはずの青春を取り戻せると考えている (27, 209, 241, 261)。他方で、ドゥービンは青春時代を謳歌することができず、ために喪失感を覚えている (228)。ドゥービンには、そのような喪失感を慰撫するための方策としてファニーとの交際を活用している側面がある。それゆえ、ドゥービンに加齢を忘却させるための、また、失われた彼の青春の補填をするための媒体として利用されていることにファニーが気づき、その点に不満を漏らすのも、至極当然といえる (267-68)。同じく、ドゥービンは、ファニーから享受できる愛が、彼の老化と死とを食い止めると認識している (260)。このように、姦通に際して、ドゥービンは肉欲以外の動機にも大いに駆られている。以上の諸点から、若さに対する憧憬の念の強靭さこそが、ドゥービンの精神性における主潮と判断できる。

その一方でドゥービンは、ファニーとの交流の際には、自分の加齢に関して強い負い目を感じている (64)。加齢が露呈した自分の肉体に対する嫌悪感の強さは、ドゥービンに自分の肉体を死体とすら認識させる結果となる (122)。彼は、妻 Kitty の老いた肉体にも嫌悪感を示す。また、ドゥービンはファニーとベニス旅行に出向くが、旅先でドゥービンは、若い男性にファニーを寝取られ、行為の最中のファニーの表情を偶然目撃する。その際にドゥービンは、現実には 20 代のファニーの表情を、50 代の女性のものと認識している (82)。つまり、ドゥービンに対する最悪の背徳の最中のファニーの表情は、彼が最も唾棄する要素である老いが基調となっており、ファニーに通常は横溢している若さの表象が完全に霧消している。このようなドゥービンの心象風景にも、老いを否定的に捉える彼の性向を明確に読み取れる。

加えて、男女の恋愛において、男性と女性との年齢差の多大さを、関係を阻害する要因としてドゥービンは認識している (65)。ファニーとの関係においても、彼女はドゥービンの加齢を決して否定的に眺めないにも関わらず、加齢を二人の関係を大いに阻害する要因と、ドゥービンは一方的に思い込んでいる (331)。以上のような彼の視点と調和する形で、ドゥービンは彼の娘 Maud を妊娠させた交際相手が 60 歳である事実を知った際に落涙しており (340)、加齢を否定的に眺める彼の視点は、娘の交際相手に対して下す判断にも反映している。当然ながら、ドゥービンは自己の老醜の表出にも神経質なまでに嫌悪感を覚え続けている (12, 56, 64, 285, 317-18)。また、性的不能状態に陥った際のドゥービンの焦燥の念の強さも、そのような彼の感性の証左と見ることができる (292)。さらに、ドゥービンは、若いファニーとは性交渉が可能であるのに、老いた妻との間では不可能の状態に陥る (256)。ドゥービンが関与する人間関係の方向性も、相手の老醜の有無によって大きく左右されており、ドゥービンの老いに対する嫌悪感の強さが作中で一貫して前景化されている。

以上のとおり、ドゥービンとロイとでは、職業、年齢、知的レベル、民族性等、あらゆる点で共通性を欠いているが、老いと若さの各々に対する評価姿勢の点では、完全に歩調を合わせている。

そのようなドゥービンに関しては、“... William Dubin will remain trapped in the prison of his own subjectivity ...” (Briganti 185). という評価が下されている。あるいは、ドゥービンは、“admitted self-centeredness” (Abramson 111) を内包する人間と位置付けられている。実際に、愛人のファニーとの関係が事情ゆえに断たれてしまった痛手を、友人の妻 Flora Greenfeld との姦通によって慰撫することを彼は想定している (294)。その際には、フローラの夫(ドゥービンの友人)に対する彼の罪悪感の欠如も強調されている。このように、ドゥービンは唾棄すべき人格の持ち主として徹底的に描かれている。老いを強く忌避する登場人物が否定的な人格を伴うパターンは、『ナチュラル』の同類といえる。

次に、老いの表象とは無縁な登場人物の描写傾向を眺めたい。まず、*A New Life* において、Orville Fairchild 教授が一貫して否定的な人物像を呈していることには議論の余地はない (Helterman 60)。そのフェアチャイルドは銀髪の豊饒さが強調されている (38)。さらには、急死する直前まで学問に関する彼の理想を、精力的かつ饒舌に語り続けている (303-4)。後に分析の対象とする、同年代と思しき *The Assistant* の Morris Bober に見られる体力や健康の衰えといった老いの表象とフェアチャイルドは無縁であり、肉体的な老いを経ることなく唐突に天寿を全うするイメージが与えられている。

モリスの妻 Ida には、通俗性や他人を犠牲にして利益を得ようとする自己中心的な性向が目立つ (203-4, 220)。彼女は、“a perpetually worried, nagging Yiddish wife” (Mandel 268) という characterization もなされており、否定的な側面が強調されている。そのようなアイダは、殆ど黒髪の状態にあり、老いの表象が割り当てられている度合いはモリスよりも格段に低い (8)。夫のモリスが作中で終始、多種多様な病気に悩まされ続けているのとは対照的に、足の痛み以外は、健康な身体状態を維持しており、老いの表象が配置されている程度はモリスよりも格段に低い。以上のとおり、マラマッド文学においては、唾棄したり、描写を免れたりする形で老いとの距離感が設けられている登場人物は、人間性の点で否定的な色調を帯びる傾向が強い。この点に関して、老いの表象が集中している登場人物、あるいは、老いを心安らかに甘受する登場人物の描写の特質について考察することにより確証したい。

### III

『ドゥービンの生活』において、ファニーはドゥービンの人格、人間性に魅了された結果、彼との姦通関係に至る (217)。そのような動機に基づいて交際を開始しているがゆえに、ファニーはドゥービンとは対照的に、姦通相手であるドゥービンの加齢を問題視しない (64)。この点は、ファニーが、若者 Roger Foster からの熱烈な求愛があるにもかかわらず、ドゥービンとの交際を優先している事実からも自明である。そのようなファニーの髪には白髪が一塊、混じっており (357)、

白っぽい顎鬚も生えている(21)。それを、ドゥーピンは当然ながら除去すべきと考えており、ドゥーピンが老いを拒絶する感性は他者に対しても適用されている。ファニーが20代前半であることを考慮すれば、彼女には、年齢とは不相応な老いの表象が配置されているといえる。さらに、ファニーは実年齢よりも老けた外見を持つ人物として描かれてもいる(23, 193)。以上のような、自分に付随する老いの表象に対しても、ファニーは拒絶反応を示すことがついぞない。そのような、ファニーに対しては、“life-giving and fruitful” (Helterman 95)、あるいは、“a positive character” (Briganti 183) といった、肯定的な属性が配置されている。同様な人物描写のパターンが登場する作品は他にもある。

『アシスタント』に登場するモリスには、極めて多彩な老いの表象が多数、配置されている。例えば、モリスは外見からして半白の髪をしている(17)。さらには、喫煙時には激しく咳き込み顔が充血する(7)。はたまた、強盗による殴打や、漏れ出たガスの吸引といった、突発的な事件や事故により何度も長期間に渡って寝込んでしまう。加えて、モリスは足元が覚束なく(31, 33, 195, 196)、めまいを覚えがちで(46)、頭痛と共に両足がぐらつき(53)、通常の歩行すらままならない。さらに、モリスは元来肺が丈夫ではない事実が繰り返し述べられ(35, 181)、レントゲン写真では肺に影が二か所も認められ、カタルに罹患している(35-36)。さらには、ヘルニアと動脈瘤の既往症もある(47, 201)。加えて、寒気が支配する屋外から屋内に入った際には暖気に頭を打ちのめされ(223)、頭痛が起こりがちで両膝に力が入らないなどの(225)、彼の体力の衰弱を伝える描写も数多い。モリスはこれらの、老いの結果たる体力の衰弱を悠然と受け入れ、決して嫌悪しない。そのモリスは、“symbolic conscience figures” (Hershinow 142)、あるいは、“the ethical center of the novel” (Richman 50) という位置付けが作中でなされている。さらに、彼の行動様式は、“heroically human Jew” (Goldman 152) と評され、また、リンカーンの神話を想起させる (Shear 211-12) という解釈すらなされ、やはり、極めて肯定的な人物像が配置されている。

ここで再度、『ナチュラル』を俎上に載せると、アイリスは、“‘Experience makes good people better’” (152). と述べている。すなわち、彼女は齢を重ねることにより、人生の質、人の判断力は向上すると考えており、ロイとは正反対に、加齢を肯定的に捉えている。さらには、アイリスは33歳の若さで、孫を持つ祖母の立場にあり、極端な形で老いの表象が割り当てられている。さらには、その状況を彼女は前向きに受容している(204)。そのようなアイリスには、“the benevolent knight supporter” (Abramson 13)、あるいは、“a life-giving figure” (Abramson 13) といった人物像が付与されている。さらに彼女は、“whose presence restores the power of Wonderboy, his Excalibur” (Wasserman 49) や、“who works for good and beneficently aids [knights]” (Wasserman 49) といった役割を有する人物であるとも指摘されてもいる。やはり、老いの表象が集中し、それらを心安らかに受容している人物には、肯定的な人物像が割り当てられている。

次に短編小説に目を移すと、“The First Seven Years”において Sobel は、彼の雇主 Feld に対する “the moral advantage” (Bilik 61) を保持する人物として描かれている。加えて、若い大学生 Max が、ソベルの娘 Miriam の視点から物質主義者として完膚なきまで酷評される一方で (11)、ソベルは彼女の深い敬愛の対象となっている (8)。このような形で、肯定的人物像が与えられているソベルの外見は、“a bold head” (7) を特徴としている。加えて、彼は 30 歳であるとは思えないほど老けこんでおり (7)、やはり、老いの表象が前景化されている。“The Last Mohican” に登場する Shimon Susskind にも、“the gray in the man’s hair” (158) が描きこまれており、老いの表象が配置されている。その彼は、Arthur Fidelman に愛を教化する重要な役割を作中で担っている。マラマッド文学においては、年長者から学べるか否かが、作品の大きなテーマとなっていることが多く、サスキンドは作中でフィデルマンを教化する重要な役割を担っている (Hershinow 144)。このように、マラマッド文学においては、肯定的人格を有する人々に対しては、老いのイメージが集中的に配置される傾向が顕著であり、また、老いを安らかに受容する人々として描かれる方向性が認められるのである。

#### IV

マラマッド文学には、遭遇した出来事や人間関係を通して、内面的、精神的に大きく成長し、当初とは異なった、肯定的人物像を獲得する登場人物が多い。そのような登場人物の典型例が、『アシスタント』において、当初は反倫理的性向を内包しながらも、モリスの倫理性に感化されることにより内面的成長を遂げ、モリスの倫理性を最終的に継承する Frank Alpine である。そのような彼は 25 歳であるが、実年齢よりも老けて見える (36)。さらには、彼の語り口と、彼が語る内容は、60 歳のモリスのものと同一性を有する (37)。作品終末部においては、フランクの背骨は猫の尻尾のように曲がっていると表現されている (241)。やはり、肯定的な人物像を最終的に獲得するフランクにも、老いの表象が集中しており、作品構造の一貫性に乱れは認められない。この点は、“The Magic Barrel” の分析を通して、より明確化する。

「魔法の樽」において、作品中盤までの Loe Finkle は、結婚相手の仲介業者 Pinye Salzman から紹介された女性に関して、“‘Did you say nineteen?’ ” (197)、“‘You’re sure she’s that young?’ ” (198) と問い、女性の若さに拘泥している。また、リオは婚姻暦を持つ女性との結婚に対しても極めて強い拒絶反応を示す (196)。このように、若さは、結婚相手の女性に関して、フィングルが絶対に譲れない条件である。以前に紹介された女性を、その後に話題にする際にも、リオは“‘Age thirty-two?’ ” (201) と述べ、年齢の高さによって女性を特定化している。リオは、ザルツマンから紹介される女性の年齢が不明確な際には苛立ちを隠せない (201)。斡旋人が紹介した女性に実際に会った際にも、その女性の “a woman past thirty-five and aging rapidly” (204) という、年齢の高さをフィン

クルは最も注視する。リオの意に沿わない女性を紹介したザルツマンへの怒りも、その女性が35歳であったことに集約されており、女性の加齢に対するリオの拒絶反応は極めて強い。

他方、リオは、作品中盤において、女性の若さに固執する姿勢から完全に解脱する。リオは、“It gave him the impression of youth—spring flowers, yet age—a sense of having been used to the bone, wasted . . .” (208). という印象を与える女性を、彼の配偶者として最適であると認識するに至る。彼女は、「骨に至るまで使い尽され」、「荒廃した」という、老いの表象が主潮の女性なのである。他方、本作をリオが内面的に成長する過程を描いた作品と見る点で、批評家の評価は一致している。例えば、“Neither Salzman nor Finkle understands love: Finkle learns about it through suffering . . .” (Abramson 133). という指摘の他にも、本作をリオの“maturation” (Richman 118) の物語と解釈する向きがある。そのような成長を遂げた後の、肯定的人物像を呈するに至ったリオは、女性の若さに固執する視点から解放されている。このように、やはり、老いを心安らかに受容する姿勢と、肯定的人物像とが連結されている。同様の作品構成は、『新しい生活』にも見出せる。

主人公の Seymour Levin は、Pauline Gilley との姦通を行う。ポーリーンはレヴィンとの間で懐妊するが、その際にレヴィンは、ポーリーンの連子二名を含む、三名の子供の父親としての責任を自由意志に基づいて背負う。このような、父親としての責務を完遂する姿勢を、マラマッド文学は極めて積極的に評価する傾向にある。批評家も、レヴィンが最終的に選択した行動様式に関して、“Sy Levin achieves a kind of unsought-after heroism . . .” (Hershinow 137)、または、“[Levin] accepts the burden of his responsibilities and chooses an active role” (Briganti 177). と指摘している。あるいは、“[T]he protagonist succeeds in overcoming his earlier traits and assumes an active role, and, consequently, achieves a positive identity” (Briganti 175).、“Levin has finally given up *eros* and is reaching for *caritas*” (Cohen, *Bernard Malamud* 70). という指摘により、終盤のレヴィンの行動様式は批評家から一様に肯定的に評価されている。

その一方で、レヴィンと対立関係を形成し続ける、ポーリーンの夫 Gerald Gilley が作中で一貫して否定的に描かれている点には疑問の余地がない (Helterman 60, Ducharme 112)。このような極めて対照的な人物像を付与されている二人を比較すると、ギリーは、生殖能力に関する瑕疵ゆえに妻を妊娠させることが叶わず、生物学的な父親としての責務を果たせない。(夫婦が養育しているのは養子である。) 加えて、彼はポーリーンとの離婚により、父親や夫としての法的な地位も喪失する。他方、作品終末部でレヴィンは、ポーリーンの二人の子供の法律上の父親となることを選択し、その上、ポーリーンはレヴィンとの間で妊娠もしており、生物学的な意味での父親ともなっている。加えて、作品終末でギリーはにわかづくりの独身者、レヴィンは長い結婚生活を送ってきた人物として、各々が、比喩的にレヴィンの視点から描写されている (351)。以上の通り、父や夫としての *identity* の有無と、レヴィンの心象風景を通して、ギリーとレヴィンとの年齢の上下関係

が、結婚暦が長いギリ（年長者）と未婚のレヴィン（年少者）という現実とは正反対のものになっている。やはり、マラマッド文学における老いの表象の配置の一貫性に揺るぎは見られない。この事実は、*The Fixer* によっても例証できる。

『修理屋』の Yakov Bok は、作品中盤まで顕著に認められる、自分の利益に固執する姿勢、自愛から作品終盤において解脱する。そのような内的変身を遂げたヤーコフは、“... Bok in his cell recapitulates the darkest, most heroic aspects of Jewish existence in the diasporas” (Alter 40). という位置付けがなされ、極めて肯定的な人物像を呈する。具体的には、妻が姦通した結果、生まれた不義の子を実子としてヤーコフは認知する。その決断は、例えば、“his maturing self-transcendence” (Cohen, *Bernard Malamud* 85) の表出と解釈されている。あるいは、彼の言動が全ユダヤ人の運命を左右することを意識しつつ自己の行動を律する作品終盤のヤーコフの姿勢は、“the necessity for moral involvement” (Alter 42) を彼が学んだ結果として解釈されている。そのような肯定的な人物像を獲得した後のヤーコフの外貌に着目すると、長期間投獄されていたヤーコフは頭髪を剃られており、髪が残存している事実が分る。ところが、ヤーコフの心象の中の彼自身は、頭皮が禿げた状態にある (325)。ここに至って、作品が肯定的に描いている登場人物に老いの表象が集中し、対照的に、作品が否定的に描いている登場人物にはそれが配置されない作品構造が、マラマッド文学の特質であることに疑いの余地がなくなった。この帰結は、“In Malamud’s world, young people are either callous and ignorant . . . or suffering and ignorant . . .” (Benson 37). という、若い登場人物の未成熟性を示唆するマラマッド文学の全体的傾向と調和している。また、本稿で明らかになった、マラマッド文学全体が共有する作品構造は、親子関係において意志の疎通の不具合が生じた場合、一様に、子供の側に責任が帰される在り方が複数作品に認められる一貫性 (Abramson 135) と歩調を合わせている。それでは、以上に確認できたマラマッド文学の特質が、作者のユダヤ系としての民族性と、どのように連動しているかを次節において考察したい。

## V

最初に、一般的なアメリカ人にとって年長者であることがどのような意味合いを有するのかを確認したい。まず、Geoffrey Gorer によると、アメリカにおいては、父親は子の行動規範となる人物とはみなされず、子に自分を追い越す可能性を与えることが父親の重大な責務であると見られている (42-43)。同様に、Margaret Mead も、アメリカ人は、両親は子供が自分たちを越えていくことを期待し (26)、両親は子供を自分たちよりも優れた存在と見なす (27) と指摘している。二人の指摘に正に歩調を合わせる形で、Tony Tanner は、アメリカ文学においては、大人になるためのイニシエーションは悪夢や幻滅的衝動、あるいは、個人の可能性の収縮だと見られる傾向が強いと主張している (323)。さらには、D.H. Lawrence も、“And they [Americans] go backwards, from old age

to golden youth. That is the true myth of America. . . . And there is a gradual sloughing of the old skin, towards a new youth. It is the myth of America” (60). と述べ、アメリカ人が若年を志向する性向の強さを指摘している。以上の論者は一様に、アメリカには加齢を否定的に眺め、また、若さを肯定する傾向が存在することを指摘している。

歴史を顧みても、アメリカは、「若さ」の類義語である「新しさ」に肯定的価値を見出す国家であった。例えば、“Contrast him [a Jew] to the archetypal American. He has no deep sense of history, going back when the patriotic occasion demands. . . . American history is *new*. This newness has always been appealing for exiles from old lands” (Malin 59). という指摘がみられる。その上、アメリカの風土が生み出す人々は、“a radically new personality, the hero of the new adventure: an individual emancipated from history, happily bereft of ancestry, untouched and undefiled by the usual inheritances of family and race” (Lewis 5) という、若年の表象と共に捉えられがちでもある。以上のようなアメリカで支配的な思考様式を考慮すれば、「若さ」がアメリカにおいて肯定的に評価されるのは当然の帰結といえる。

以上に確認できた、アメリカにおいて一般的な、若年と加齢、各々に対する見解と、ユダヤ系の間で一般的に認められる精神構造とは、対極の関係にある。例えば、“The archetypal Jew embraces the rule of the father; the archetypal American rebels against the father” (Malin 35). という素描から分るとおり、一般的なアメリカ人とは正反対に、ユダヤ人は年長者たる父親の行動規範を重視するのが一般的なのである。さらには、“The father is the benevolent teacher; the son is the obedient student” (Malin 32). という形で、ユダヤ系の間では、若年世代の人々が年長者に服従するのが当然とされている。ユダヤ教の特性に目を向けても、“The Jewish religion has as a major motive the consolidation of father-son relations through the submission of the son to paternal authority” (Wolfenstein 522). と指摘されている。つまり、ユダヤ教は両親の権威に子が服従する形の親子関係を当然視している。子供や孫が、両親や祖父母に忠誠心を示すのを当然とみなす心性がユダヤ系の間において顕著である点は、他の論者も指摘している (Sklare 264)。ここで再度、アメリカ人両親の一般的傾向に目を向けると、“American parents’ avoidance of a dominant authoritative role” (Wolfenstein 533) の存在が指摘されている。年長者と若年層の各々に対する、ユダヤ系と一般的アメリカ人の評価の間には、鮮明な対立軸が存在している。

在米ユダヤ系の歴史を顧みても、移民直後に肉体労働を余儀なくされたアメリカでの移民一世は、子供たちの教育に関する配慮を行うことによって、子が親と同じ状況に置かれることを回避するケースが非常に多かった (Glazer 80)。つまり、子に対する両親の指導が、子の将来性を劇的に改善した過去が在米ユダヤ人の間には存在している。ユダヤ系の両親が子の畏敬の念の対象となってしまうべき歴史的現実もアメリカには存在している。

アメリカのユダヤ系の著名な文化人の自伝を紐解いても、例えば、Irving Howe は、“[E]ven the most rebellious sons still forced by circumstance and feeling to remain within the cultural orbit of their fathers” (Howe 183). や、“It was from her place in the kitchen that the Jewish housewife became the looming figure who would inspire, haunt, and devastate generations of sons” (Howe 174). と述べ、両親の権威を痛感した子供時分の心性を回顧している。同様に、Alfred Kazin も、幼少時に感じた、ブルーカラーの父親に対する尊敬の念の強さを述懐している (*A Walker* 52-53)。さらに彼は、父親が体に付着した塗料を洗い落とすのを手伝った際に、“... I was really helping him, that I, too, was contributing to the greatness of the evening and the coming day” (*A Walker* 53). という感情を抱いたという。この回想からも、父親の存在感の甚大さを彼が痛感していた事実が分る。他にも、“My great moment came at six, when my father returned from work ...” (Kazin, *A Walker* 52). や、“But as a boy I idolized him [father] for the connection with America-at-large that he had made as a painter on the Union Pacific Railroad” (Kazin, *New York* 10). といった同様の傾向を有する記述が見出せる。以上の通り、子供時代に両親に対して覚えていた畏怖の念、尊敬の念を強調する記述を、複数の著名な在米ユダヤ系文化人は残している。

さらには、ユダヤ系の家庭においては、ユダヤ人の伝統に関する教育を両親が子供に対して施すことが期待されている (Fishman 53)。また、ユダヤ人としての生活様式を維持していくために必要な技能や情報は家庭内で日常的に両親から子供に教示される (Fishman 54)。加えて、聖職者、預言者、導師等の年長者がユダヤ人とユダヤ教の存続に貢献していると捉える、ユダヤ人の一般的な視点が以下の形でも提示されている。

For many centuries, those who determined how the history of the Jews' past was to be told had the power and the authority to do so—kings, prophets, priests, and, for well over fifteen hundred years thereafter, rabbis. It was they who modeled Jewish historic consciousness out of the events of the past, appropriating history in the service of Jewish survival and of the survival of Judaism. (Dawidowicz 5)

このような指摘の例証として、ユダヤ人の多岐に渡る歴史を子供時分に父親から学んだというケイジンの述懐を挙げることができる (Kazin, *New York* 11-12)。対照的に、大学においてユダヤ系の若者が伝統的なユダヤ文化とは異質な文化に感化されることは、ユダヤ系の伝統の消滅に連なりかねないため、大学生が置かれた状況をユダヤ系にとっての脅威と捉える見方が在米ユダヤ系の間には存在する (Sklare 269)。他にも、以下の同一趣旨の指摘がみられる。

Assimilation steadily increases from generation to generation in what's been called a chain effect. Even when the Jew who marries a non-Jew remains Jewish, his or her children are much less likely to do so and the grandchildren even less likely. (Abrams 112)

以上の通り、若年層をユダヤ系民族の消滅の危機の端緒と眺める視点が在米ユダヤ系の間では顕著である。それとは対照的に、年長者をユダヤ人の民族性の消滅の危機を除去することに与る人々と捉える感性が、少なくともユダヤ人としての自意識が活発な在米ユダヤ人の間には存在している。

現在のユダヤ人の倫理観に関しても、“To do Jewish ethics is to stand within a legal tradition stretching back across the centuries. It is to see oneself as bound by legal precedents . . .” (Newman 201). と指摘されている。この観察によると、過去のユダヤ系偉人との関連性において自己の行動を規定するのがユダヤ人の倫理観に沿った生き方なのだ。さらには、“[W]hat distinguishes these models of Jewish ethics from one another are their respective ways of construing the tradition . . .” (Newman 200). という形でも、伝統志向を本質とするユダヤ的倫理観の方向性が指摘されている。これらの観察によると、ユダヤ人の行動規範は伝統という過去に依存しており、過去の世代の人々の生き方が必然的に注視の対象となる。加えて、ユダヤ系の家族においては、子供時分のユダヤ人としての行動規範が両親よりも、祖父母に見いだされる傾向にある点が、“The grandparents . . . hold out powerful positive images of attractive Jewish role models” (Cohen and Eisen 48). という形で指摘されている。その結果、“[G]randparents played a major role in anchoring their Jewish identity” (Cohen and Eisen 48). という年長者の重要な役割が、ユダヤ系の民族性の維持に関して生じる。以上に引用した、複数のユダヤ文化論が一致して示す通り、ユダヤ系は、一般的なアメリカ人とは正反対に、年長者に若年層以上の価値を見出す傾向が極めて顕著なのである。

## 結論

マラマッド文学においては、老いの表象が集中している登場人物、また老いを忌避しない登場人物に対しては、肯定的色彩が強い人物像が配置されていた。他方、老いを忌避するか、または、老い表象の分配が相対的に些少な登場人物に対しては、否定的色彩が強い人物像が割り当てられていた。以上に確認できたマラマッド文学の作品構造は、まさに、ユダヤ人の中に一般的に見られる、年長者の人間の価値を高く眺める文化的背景を精確に反映している。さらに、そのような、年長者を肯定的に眺めるユダヤ人の価値体系は、アメリカにおける一般的な感性とは対極の関係にあった。そうであるならば、アメリカの一般的な精神風土と特に対立軸を形成しているユダヤ精神に対して、作中で特段の焦点が当てられていると考えられる。ここにおいて、在米ユダヤ人と他の非ユ

ダヤ系アメリカ人との間に見られる、一般的感性の差異を強く意識しつつ作品執筆を行うマラマッドの創作姿勢が確認できる。しかしながら、マラマッド文学が内包する、ユダヤ系特有の価値体系に対する作者の意識を反映した作品構造は、極めて不分明な形で作品群の奥底に沈潜していた。それゆえ、その構造は、複数作品の描写を同時に視野に入れつつ行われることはない通常形態の読書を通して読者に知覚される可能性は、ほぼ皆無であろう。このように、対読者という点では極めて不分明な作品構造であるにもかかわらず、ユダヤ的価値観を反映した作品構造の統一性の維持に作者は多大なエネルギーを傾注しており、この局面での創作が作者にとって有する重要性は際立っている。マラマッドの作品執筆にあって、彼のユダヤ人としての自意識の強さは、創作における極めて重要な原動力であったと言わねばならないのである。

#### Works Cited

- Abrams, Elliot. *Faith or Fear: How Jews Can Survive in a Christian America*. New York: Free Press, 1997.
- Abramson, Edward. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne, 1993.
- Alter, Robert. "Jewishness as Metaphor." *Field and Field*. 29-42.
- Benson, Jackson. "An Introduction: Bernard Malamud and the Haunting of America." *The Fiction of Bernard Malamud*. Ed. Richard Astro and Jackson Benson. Corvallis: Oregon State U P, 1977. 13-43.
- Bilik, Dorothy. *Immigrant-Survivors: Post-Holocaust Consciousness in Recent Jewish American Fiction*. Connecticut: Wesleyan U P, 1981.
- Briganti, Chiara. "Mirrors, Windows and Peeping Toms: Women as the Object of Voyeuristic Scrutiny in Bernard Malamud's *A New Life* and *Dubin's Lives*." *Critical Essays on Bernard Malamud*. Ed. Joel Salzberg. G.K. Hall: Boston, 1987. 174-86.
- Cohen, Sandy. *Bernard Malamud and the Trial by Love*. Amsterdam: RODOPI N.V., 1974.
- Cohen, Steven, and Arnold Eisen. *The Jew within: Self, Family, and Community in America*. Bloomington: Indiana UP, 2000.
- Dawidowicz, Lucy. *What is the Use of Jewish History?* New York: Schocken Books, 1992.
- Ducharme, Robert. *Art and Idea in the Novels of Bernard Malamud: Toward The Fixer*. Hague: Mouton, 1974.
- Field, Leslie, and Joyce Field, eds. *Bernard Malamud and the Critics*. New York: New York U P, 1970.
- Fishman, Sylvia Barack. *Jewish Life and American Culture*. New York: State U of New York P, 2000.
- Glazer, Nathan. *American Judaism*. Chicago: U of Chicago P, 1989.

- Goldman, Mark. "Comic Vision and the Theme of Identity." *Field and Field*. 151-70.
- Gorer, Geoffrey. *The Americans: A Study in National Character*. 1948. Watford: Arrow Books, 1959.
- Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. Columbia: U of South Carolina P, 1985.
- Hershinow, Sheldon. *Bernard Malamud*. New York: Frederick Ungar, 1980.
- Howe, Irving. 1976. *World of Our Fathers*. New York: Schocken Books, 1990.
- Kazin, Alfred. *New York Jew*. 1978. Syracuse UP, 1996.
- . *A Walker in the City*. 1951. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979.
- Lawrence, D.H. *Studies in Classic American Literature*. 1923. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- Lewis, R.W.B. *The American Adam: Innocence Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. 1957. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1963.
- . *Dubin's Lives*. New York: Farrar Straus Giroux, 1979.
- . "The First Seven Years." *The Magic Barrel*. 3-16.
- . *The Fixer*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1966.
- . "The Last Mohican." *The Magic Barrel*. 155-82.
- . *The Magic Barrel*. 1958. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.
- . "The Magic Barrel." *The Magic Barrel*. 183-91.
- . *The Natural*. 1952. New York: Farrar, Straus and Giroux, 2003.
- . *A New Life*. 1961. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970.
- Malin, Irving. *Jews and Americans*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1966.
- Mandel, Ruth. "Ironic Affirmation." *Field and Field*. 261-74.
- Mead, Margaret. *And Keep Your Powder Dry: An Anthropologist Looks at America*. 1965. New York: Berghahn Books, 2000.
- Newman, Louis. *Past Imperatives: Studies in the History and Theory of Jewish Ethics*. New York: State U of New York P, 1998.
- Richman, Sidney. *Bernard Malamud*. Boston: Twayne, 1966.
- Shear, Walter. "Culture Conflict." *Field and Field*. 207-18.
- Sklare, Marshall. *Observing America's Jews*. Hanover: Brandeis UP, 1993.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. London: Jonathan Cape, 1971.
- Walden, Daniel. "Bernard Malamud and His Universal *Menschen*." *The Magic Worlds of Bernard Malamud*. Ed. Evelyn Avery. New York: State U of New York P, 2001. 167-74.
- Wasserman, Earl. "The Natural: World Ceres." *Field and Field*. 45-65.

Wolfenstein, Martha. "Two Types of Jewish Mothers." *The Jews: Social Patterns of an American Group*.  
Ed. Marshall Sklare. New York: Free Press, 1958. 520-34.



JOURNAL  
OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
No. 82      March 2013

CONTENTS

Malamud's Jewish Consciousness in the Presentation of Aging

Johji MAEDA ..... 1

The Department of Comparative Culture  
The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
2013